

命をつなぐ

薬のリレー

3・11もうひとつの震災物語

3月11日に発生した東日本大震災により、被災されました皆さまに対し、謹んでお見舞い申し上げます。

薬（ホルモン剤）を使用できないと短期間で命の危険に陥る、「中枢性尿崩症」及び「下垂体機能低下症」の患者さんの命を守るため、奈良県の岡本内科こどもクリニックの岡本新悟先生（医師）、早稲田大学 Y M C A ボランティア隊を中心に、複数の患者会、関係者などが連携し、被災地に薬を届けました。



▲早大YMCAボランティア隊のホルモン剤搬送ルート

未曾有の東北大震災から3ヶ月たった今もなお、被災地では余震の不安、原発問題、生活の見直し：さまざまなことが未解決のままです。「不安共有」の時代を迎え、何を考え、どう生きるかが問われるなか、震災時、いち早く行動を起こした早大 Y M C A 災害援助ボランティア隊の活動を取材しました。

活動の中心となった早稲田大学 Y M C A 主事 学生寮「信愛女子舎」舎監で、20年以上のボランティア実績を持つ石戸充さんと、早稲田大学創造理工学部3年生（震災当時2年生）で、早大 Y M C A 学生幹事長の塩澤壮吾さんにお話を伺いました。

特集／夏の生活習慣

■被災地に派遣隊を!

震災当時、寮にいた石戸さんと塩澤さんは、東京でも多くの帰宅困難者が出る事態を察知。女性宿泊禁止の男子寮ですが、すぐツッターで情報を流して、女性を含む6名の方を受け入れました。やがて大隈講堂も開放され、その問題は解決したのですが、あまりの被害の大きさに、「早急に被災地に派遣隊を送ろう」という話が持ち上がったのです。真っ先に手を上げたのは塩澤さんでした。塩澤「寮を避難所にと提案した時点ですでに、僕は今回の『大震災』との接点を持ったのです」

まだ余震や津波の恐れもあり、原発問題も出てきた頃でした。まわりからは危険は避けるべきという声も出しましたが、そんななか、「被災地へ薬を届ける」話が持ち込まれ、早大 Y M C A が引き受けることになりました。

石戸さん率いる早大 Y M C A ボランティア隊はこれまでも、阪神、中越の地震やミャンマーのサイクロン、ジャワの地震の際も現地チームと連携しながら活動してきた実績があり、当然ながら食事から宿泊、トイレ、ガソリンまで用意できるグループですが、それ

特集／夏の生活習慣

■「助けてください」のメール

被災地へ薬を届けることになったきっかけは、3月14日、早大 Y M C A の理事をしている加納貞彦教授（「ふるむな」前号にご登場）の元へ届いた一通のメール。「中枢性尿崩症」患者会副代表・大木里美さんがメーリングリストに流した「助けてください」のメールでした。その内容は、奈良県の内分泌・代謝内科専門医の「岡本内科こどもクリニック」岡本新悟院長が、下垂体機能障害患者のために「災害時ホルモン補給援助チーム」を立ち上げたものの、希少な薬を被災地へ届けるすべがないというものでした。

岡本「私は内分泌疾患を専門とする医師であり、ふだんは救急とは縁遠いところで仕事をしています。が、いざ大災害となると、下垂体機能障害の患者さんがホルモン剤の補給が途絶えることによって、危急を要する事態になることは容易に想像できました。そこで、患者会などにメールを流して、私が用意したホルモン剤の被災地への搬送協力を呼びかけたのです」

被災地にいる患者さんのために一刻も早く薬を届けたい。薬が地震や津波で流されてしまい、さらにこの病気の症状を知らない人に、「貴重な水を独り占めする気か!」と水を制限されたら、患者さんはやがて死んでしまう。患者さんのなかには子どももいます。誰がどうやって被災地に届けるか。

そのとき、加納教授たちの呼びかけで、石戸さんや塩澤さんが被災地への医薬品の搬送を引き受けてくれることになったのです。石戸「最初は東京の大病院と運動して動くつもりでしたが、今は対応できないとのことでした。大規模な組織だからできることもあるし、今回私たちがしたような、特定のものを特定の場所に確実に届けるという、小規模だからこそできる活動も必要だと実感しました」

3月15日、岡本院長のお嬢様奈香子さんが奈良で薬を受け取り、京都経由新幹線で薬を運んでくださり、ボランティア隊の手に渡りました。メンバーは、石戸さん、塩澤さん、就職セミナーが震災の影響で中止になったため参加してくれた伊藤さん、実家が仙台の吉丸さん、友人で東京に来ていた東北大学の片岡さん。

実際に向かうのは5名ですが、事務局本部を設置し、資金集め、宿泊先の手配、連絡、必要な情報の収集：何人も人がさまざまに仕事を分担して、周到な準備をしたのです。

石戸「一回でも事故があったらそこで終わりになってしまいます。毎回、必ず安全に行って、安全に帰って来ることを想定外のことを想定して行かなくてはいけないのです」



▲岡本奈香子さん（中央）と、早稲田大学YMCAボランティア隊

予報は雪ということでしたが、実際には猛吹雪。さらに原発の危険、余震の恐れだけでなく、橋が崩れかかっていたり、通行止めがあつたり、道が陥没してでこぼこだったり。新潟の雪道を走るなか、左を向けば日本海の荒波、右からは容赦なく吹きつける雪。海水と地吹雪が入り混じり、行く先は真っ白な壁のようで、視界がゼロに。車内には許容量ギリギリまで救援物資を詰め込み、膝の上にも山盛りの荷物を抱えている状態。車体が重たいので、地震でできた段差に乗り上げるとバーストする危険もあり、慎重が必要でした。

石戸「こんなときこそ焦らず、気持ちを平らにして、『必ず届ける』ための冷静かつ、的確な判断をした。必ず安全に行き、必ず安全に帰る。被災地へ薬を届けることになったのは、3月14日、早大 Y M C A の理事をしている加納貞彦教授（「ふるむな」前号にご登場）の元へ届いた一通のメール。「中枢性尿崩症」患者会副代表・大木里美さんがメーリングリストに流した「助けてください」のメールでした。その内容は、奈良県の内分泌・代謝内科専門医の「岡本内科こどもクリニック」岡本新悟院長が、下垂体機能障害患者のために「災害時ホルモン補給援助チーム」を立ち上げたものの、希少な薬を被災地へ届けるすべがないというものでした。



▲猛吹雪のなかを進む車中から（於・山形）

「心をつなぐボランティア活動」

石戸さんたちは翌日、東北大学病院でボランティア活動をしてから帰京しました。その後、第1陣の報告会を聞いた学生たちが「自分たちも行きたい」と言ってくれて、この活動は第7陣まで続いています。



▲林田素美（株）林田プロジェクト代表取締役社長 群馬大学医学部非常勤講師 市民と医療を結ぶ会理事

特集／夏の生活習慣

お話を伺って： 今回の震災で皆さまにもさまざまな形で影響があると思います。こんなときこそ、『気持ち』が健康でないと前へ進めません。今号では、率先してボランティア活動を行った人たちの取材しました。この他にも掲載しきれなかった多くのことがありましたが、災害に弱い患者たちの不安、工場被災で薬の製造が危ぶまれている現状、今後の薬配送ルートの開拓…。見えてきたことを大切に、改めて、その後の震災物語を皆さまにお伝えしたいと思っています。